

スポーツは街を強くするのか——行政と企業の視点で語る 「地域経営」の可能性



スポーツが街にもたらす価値とは何なのか——かつて教育の一環であった体育は、スポーツへと形を変えていき、エンターテインメントや健康促進、地域交流など、その役割と価値を少しずつ広げている。

渋谷区が3月7日に開催した「スポーツアコード渋谷」では、渋谷区長 長谷部健と、V・ファーレン長崎の代表取締役社長や WE リーグチェアとしてスポーツビジネスの最前線で活躍してきた高田春奈氏によるトークセッションを実施。公と民というそれぞれの立場で培ってきた考えや育んできた想いを語り合った。

スポーツが持つ力と可能性

対話は、両者が考えるスポーツの定義と役割から幕を開けた。

長谷部区長が、最初に触れたのはスポーツの語源であるラテン語の *deportare*（デポルターレ）だった。「デポルターレは、『気晴らし』『発散』『遊び』という意味の言葉です。この語源に立ち返ると、例えばシニアの方々に人気のカラオケもスポーツと位置付けても良いと思っています。渋谷区のスポーツ推進計画は、この語源が持つ意味と可能性を元に策定しています」。

スポーツを広義に捉えることで、その可能性がさらに広がっていくと渋谷区長は話す。

実際に、渋谷区では「思わず身体を動かしたくなる街へ」をビジョンに掲げ、区内を「15 km²の運動場」と捉え、日常的な運動も、楽しみで行うスポーツも、全てが暮らしに溶け込むまちづくりを進めている。



渋谷区長 長谷部 健

高田氏は、V・ファーレン長崎の代表を務めた経験をもとにプロスポーツクラブが地域に与える力の大きさについて語った。

「2017年にV・ファーレン長崎は初めてのJ1昇格を決めました。その時の盛り上がり、私自身も圧倒されました。人生で初めて心が躍ったと感じてくださる方がたくさんおり、スポーツが持つ可能性の大きさを強く実感した瞬間でした」。

長崎県の人口は130万人ほどだが、当時J1昇格が決定する瞬間には2万人以上のサポーターがスタジアムに駆けつけた。その後も、シニアの方々をはじめ、幅広い年齢層の方々がクラブの応援を生き甲斐にされている姿を目にしてきたと高田氏は話す。

都心に比べると娯楽が少ない地方において、スポーツは人生を豊かにする重要なピースの一つとなっていると言えるだろう。

さらに、ダイバーシティの推進という点においても、スポーツには大きな可能性があるという高田氏は続ける。

「WEリーグでは、Jリーグが約30年にわたって築き上げた歴史を踏襲することはもちろんですが、WEリーグだからこそ生み出せる価値を見出していくことにも力を注いでいました。その一つが、ダイバーシティの推進です。『女性もプロサッカー選手として活躍できる』『自分の好きな生き方を選べる』という

メッセージを発信していくことが、より豊かな社会づくりに寄与できると考えています」。

スポーツの価値は数字だけでは測れない

セッションのテーマは「経営」へと移っていく。黒字化を軸に対話が進む中で、行政と民間企業での違いと共通点が見えてきた。

「もちろん、私たちはスポーツ政策での黒字化を目指しています。一方で、スポーツへ投資することで得られるメリットは、単純な収益だけでは測れない部分があります。スポーツをする機会が増えることによる区民の皆さんの健康促進、通院回数の減少、地域交流の活性化など、さまざまな効果が生まれます。これらのメリットは数字に換算することが難しいのですが、区の政策全体として考えると非常に大切だと考えています」。

区として総合的な視点でスポーツを捉えていくとする一方で、スポーツの普及自体にも課題はある。一例として挙げられたのは、女子中学生のスポーツ離れだった。これまで多くの学生にスポーツをする機会を提供してきた部活動は、試合で勝つことが目標となるケースが多いことや、子どもたちのニーズに合致した種目を提供できていない現状があり、それが現代ではスポーツと距離を置く原因の一つとなっている。

この課題解決を目的の一つとして、渋谷区の部活動改革プロジェクトの一環である「シブヤユニテッド」では、ダンスやスケートボードなど勝敗に関係なくスポーツを楽しめる場を提供している。



シブヤユニテッドは、主に区立中学生を対象に、これまでの学校部活動にはなかったスポーツや文化活動に参加できる地域クラブ。現在、全 14 種目・16 クラブを展開している（画像提供：一般社団法人渋谷区スポーツ協会）

地域に愛されるクラブの作り方

長谷部区長のトークに続く形で、高田氏は行政とプロスポーツクラブの共通点について、自身の経験を交えながら考えを伝えた。

「長谷部区長のお話を聞いていて、共通している点は大きく2つあると感じました。1つ目は、理念を軸に活動している点。この理念に共感してくれる人を増やしていくことが重要です。2つ目は、より多くの人たちに必要とされるサービスを追求する点だと思います。そして、理念を知っていただき、たくさんの方々に必要とされるクラブになっていくために欠かせないのが、地域貢献活動です」。

V・ファーレン長崎の代表時代には「絶対に地域貢献活動をやる」と決め、選手やクラブの人気マスコットとともに離島も含めた長崎県内の各地に、毎年足を運んだという。すぐに成果に直結するわけではないが、高田氏はクラブを地域に根付かせていくためには絶対に欠かせない取り組みであると話す。「大変な活動ではありましたが、毎年訪問する度にクラブに対する熱量が高まっているのを実感しました」。スポーツを地域に根付かせるには時間がかかるかもしれない。しかし、一歩踏み出して継続することで、その活動は少しずつ実を結んでいく。

ここで、長谷部区長からスポンサーとの関係性構築について質問が投げかけられ、高田氏は答える。

「長崎には、“平和”という県民が共通して持っているテーマがあります。平和を意味する『VREDE (ブレダ)』はクラブ名の由来の一つにもなっており、『クラブが強くなることで、平和の大切さを世界に発信したい』という考えに対して、多くのスポンサー様に共感していただき、ご支援いただくことができたと思っています」。

地域密着型のJリーグにおいては、地域の特性とビジネスをつなげていくことが経営を成功させる上で欠かすことのできないファクターなのかもしれない。



V・ファーレン長崎の代表取締役社長やWEリーグチェアとしてスポーツビジネスの最前線で活躍してきた高田春奈氏

スポーツが呼び起こす街の誇り

「シビックプライドは、作るものなのでしょうか？ 育てていくものなののでしょうか？」。セッションの最後のパートは、ファシリテーターからの問いかけから始まった。シビックプライドとスポーツの関係性について両者の考えは重なっていく。

長谷部区長は、「シビックプライドはカルチャーと非常に似ていると捉えています。渋谷にはファッションや音楽のカルチャーがありますが、行政が作ったものではありません。やはり、街に住んでいる人たち、事業を営んでいる人たちから生まれてくるものなんだと思います。私たちは、そのシビックプライドが大きくなっていくことを妨げず、逆に区民の皆さんの背中を押す施策や規制緩和などの対応を通じて推進していきたいと考えています。

シビックプライドは育てていくものという考えは、高田氏も同じだった。

「長崎は出島での貿易が盛んだった歴史もあり、ダイバーシティの考えが浸透しており、おもてなしの精神に富んだ土地だと思っています。例えばアウェイからいらっしゃるサポーターの方にもおもてなしで迎えるような姿は、通常のJリーグともまた違う風景です。また、普段はそんなに長崎という故郷を感じていない人も、サッカーを通して地元を応援するという体験ができるようになりました。そんな経験もあり、スポーツにはさまざまな機会提供を通じて、シビックプライドを引き出す力もあるのではないかなと考えています」。

日々の生活の中で、地元に対する誇りを感じる機会はなかなか少ない。だからこそ、スポーツイベントがもたらす、ささやかな非日常は自分たちの魅力を再確認する貴重な機会となっているのだろう。



「スポーツアコード渋谷」は、渋谷区内のスポーツ振興団体、民間事業者、トップスポーツチーム、アスリート、地域関連団体など、政策の実現に携わるスポーツ関係者が一堂に会し、区のスポーツ振興に関する情報共有や共通認識を図る場として実施している。

最後に高田氏は、「渋谷区ではスポーツで区民の皆様の人生を豊かにするために、従来の枠組みに捉われず、多様で先進的な取り組みをされており、本当に素晴らしいと感じました」とセッションを振り返った。

そして、長谷部区長は「高田さんのお話を聞いて、改めて理念の大切さや地域の特性に寄り添い、共に歩んでいくことの素晴らしさを実感できました。これまでも、みんなで考える姿勢は大切にしてきましたが、本日のセッションを通じて、より多くの人たちに参画していただき、スポーツ振興の輪をさらに大きくしていきたいと思いました」という言葉でセッションを締め括った。

スポーツが生み出す価値は、勝敗や興行だけにとどまらない。健康や交流、生きがい、そして街への誇り――さまざまな形で人と地域をつないでいる。行政と民間、それぞれの立場から語られた今回の対話は、スポーツが街の未来をつくっていく原動力の一つになり得ることを改めて示していた。